

# 和田芽衣さん

(写真家)

## 「娘(病)とともに生きていく」

根治不可の先天性の難病を抱える娘の写真を撮り続け、三十枚のモノクロ写真で二〇一六年第十二回「名取洋之助写真賞奨励賞」を受賞した。ファイナードー越しに娘の病と向き合う和田芽衣さんに聞いた。

心理士から母へ

——なぜ名取洋之助写真賞に応募しようと思ったのでしょうか？

二〇一五年の応募が終わるころに賞の存在を知りました。三十枚一組で応募する規定なので、「とりあえず」の付け焼き刃ではなく、万単位で撮りためていた写真の中からきちんと吟味して、「来年には応募しよう」と決め、手帳にも目標として書きました。この写真を使いたいというのはある程度決まっていたのです

が、残り一、二枚をどれにしようか最後まで悩んで、締め切り日の消印有効だったので郵便局が閉まる五分前に駆け込んだんです。応募しないと何も始まりませんから、先延ばしにせずにチャレンジしたのですが、そんな状況だったのでまさか受賞できるとは、と驚きました。

——受賞作品のテーマは「娘(病)とともに生きていく」。どんな思いを込めたのでしょうか？

娘が発症してから撮り続けてきた写真は、何かしらの形で発信したいとは思っていました。でも、病気のことでですから、どう伝えるかが非常に難しいんです。

いまはブログもありますし、ライブで届けることも可能ですが、リアルタイムで発信してしまつと感情がむき出しになって、見る人が目をつむりたくなるような伝え方になってしまう危険性がある。当時は「ツイッター」で赤裸々に気持ち吐き出していました。写真

真を載せることはありませんでした。

それでも、自分の記録のために、言葉ではなく写真で当時の感情を残そうと思いました。「かわいそう」

という気持ちだけで終わらないように、かといって嘘ではなく、暗いけれど暗すぎず、なんとかこなしてきた五年間を三十枚にまとめたつもりです。

——写真とはどのように関わってきたのですか？

中学一年生のときに写真部に入り、高校でも写真部でした。当時から普段の生活を切り取るようなスナップ写真を撮るのが好きだったので、学校の修学旅行でもみんながピスサインをしたらカメラは下ろしました。「普段のほうがすてきなのに、ピスなんかしてつまらない」などと言って。自分の顔は本人より周りの人のほうが見ていたりしますよね。その人のすてきな瞬間やその人らしさ、「いつもこういう顔するよね」といったものを撮って残すのが好きでした。

東海大学時代は、表現の一つとしてメディアのあり方に興味があったので、広告研究会というサークルに所属していて、カメラは趣味で撮っていましたが、それをどこかに発表するようなことはせず、本心にプライベートだけで楽しんでいました。北里大学大学院では修士二年の終わりごろ、ほんの一瞬だけ写真部に所属しました。私は暗室作業がとても好きで、暗い部屋に入ったら八時間でも九時間でも集中できました。



わだ・めい 1983年神奈川県生まれ。東海大学文学部心理・社会学卒業。北里大学大学院医療系研究科医療心理学修士課程修了、同博士課程単位取得退学。埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科助教を経て、2014年から写真家・佐藤秀明氏に師事し、15年からフリーランスの写真家として活動している。